

# 1 天体の絡む運動, 等速円運動, 単振動の時間追跡

【メモ】

・問(1)は等速円運動に関する問題。等速円運動は、以下の立式が定石（今回はつりあいは  $0 = 0$  と自明な式であり不要）。

$$\left\{ \begin{array}{l} \text{運動方程式 (中心成分)} \\ \text{つりあい (←使わないことも)} \end{array} \right.$$

・等加速度運動, 単振動は時間追跡とエネルギー収支のいずれでも解析できる運動であり, 問(2), 問(4)では時間追跡 (運動方程式), 問(3)ではエネルギーでの誘導が付いている。

・問(2)では単振動の時間追跡, 問(3)は等加速度運動の時間追跡である。・問(3)では仕事の計算が問われている。仕事の計算は以下の通り。

$$W = \left\{ \begin{array}{l} \cdot \text{力 } f \text{ の具体的な形が既知} \rightarrow \text{定義から直接計算} \\ \rightarrow \left\{ \begin{array}{l} f \text{ 一定の場合: } |f| |\Delta x| \cos \theta = \vec{f} \cdot \Delta \vec{x} (\Delta \vec{x}: \text{変位}) \\ f \text{ が一定出ない場合: } (f \text{ の } x \text{ 積分}) = (f - x \text{ グラフの面積}) \end{array} \right. \\ \cdot \text{力 } f \text{ の具体的な形が不明} \rightarrow \text{エネルギー収支から逆算} \end{array} \right.$$

【解答】

問(1) (a) 公式より,

$$F_1 = G \frac{Mm}{(R+h)^2}.$$

(b) 運動方程式 (中心成分) より,

$$m \frac{V^2}{R+h} = G \frac{Mm}{(R+h)^2} \quad \therefore V = \sqrt{\frac{GM}{R+h}}.$$

(c) 速さ  $V$  で  $2\pi(R+h)$  進む時間を求めればよいので,

$$T = \frac{2\pi(R+h)}{V} = 2\pi(R+h) \sqrt{\frac{R+h}{GM}}.$$

問(2) (a) 地球の密度  $\rho$  は, 密度の定義より,

$$\rho = \frac{M}{\frac{4}{3}\pi R^3}$$

であるから, 半径  $r \leq R$  の球内の質量は,

$$M' = \frac{4}{3}\pi r^3 \rho = \left(\frac{r}{R}\right)^3 M.$$

(b) 前問より,

$$F_2 = -G \frac{M'm}{r^2} = -\frac{GMm}{R^3} r.$$

(c) 運動方程式より,

$$m\ddot{r} = -\frac{GMm}{R^3} r \quad \therefore \ddot{r} = -\frac{GM}{R^3} r$$

となり, 角振動数  $\omega = \sqrt{\frac{GM}{R^3}}$ , 振動中心  $r = 0$  の単振動を行うことがわかる. 以上より周期  $T_2$  は,

$$T_2 = \frac{2\pi}{\omega} = 2\pi R \sqrt{\frac{R}{GM}}.$$

問(3) (a) 仕事の定義より,

$$W_1 = \int_{R+h}^R \left( -\frac{GMm}{r^2} \right) dr = \left[ \frac{GMm}{r} \right]_{R+h}^R = \frac{GMmh}{R(R+h)}.$$

(b) 仕事の定義より,

$$W_2 = \int_R^0 \left( -\frac{GMm}{R^3} r \right) dr = \frac{1}{2} \frac{GMm}{R}.$$

(c) 物体のエネルギー収支より,

$$\frac{1}{2}mv^2 - \frac{1}{2}m \cdot 0^2 = \frac{GMmh}{R(R+h)} + \frac{1}{2} \frac{GMm}{R} \quad \therefore v = \sqrt{\left(1 + \frac{2h}{R+h}\right) \frac{GM}{R}}.$$

(d) 位置エネルギーの定義より\*1,

$$\begin{aligned} U &= - \int_{\infty}^r F dr = - \left\{ \int_{\infty}^R \left( -\frac{GMm^2}{r} \right) dr + \int_R^r \left( -\frac{GMm}{R^3} r \right) dr \right\} \\ &= \left[ -\frac{GMm}{r} \right]_{\infty}^R + \left[ \frac{1}{2} \frac{GMm}{R^3} r^2 \right]_R^r \\ &= \frac{GMm}{2R^3} (r^2 - 3R^2). \end{aligned}$$

問(4) 小球 1, 2 の中心からの距離をそれぞれ  $r_1, r_2$  と記す.  $t: 0 \rightarrow t_0$  において,  $r_1 = R, r_2: R \rightarrow 0 \rightarrow R$  であり,  $t: t_0 \rightarrow 2t_0$  において,  $r_1: R \rightarrow 0 \rightarrow R, r_2 = R$  より, 小球 1 が (お), 小球 2 が (か) となる.

\*1 詳しくは【補足】を参照.

## 【補足】位置エネルギーの定義

物体の始状態における位置を  $x_{\text{ini}}$ ，運動エネルギーを  $K_{\text{ini}}$ ，終状態における位置を  $x_{\text{fin}}$ ，運動エネルギーを  $K_{\text{fin}}$  とする．物体にはたらく力を  $f$  とすると，物体のエネルギー収支の式は，

$$K_{\text{fin}} - K_{\text{ini}} = \int_{x_{\text{ini}}}^{x_{\text{fin}}} f dx$$

と書ける．ここで，適当な位置  $x_0$  を定めると，

$$\begin{aligned} K_{\text{fin}} - K_{\text{ini}} &= \int_{x_{\text{ini}}}^{x_{\text{fin}}} f dx \\ &= \int_{x_{\text{ini}}}^{x_0} f dx + \int_{x_0}^{x_{\text{fin}}} f dx \\ &= - \int_{x_0}^{x_{\text{ini}}} f dx + \int_{x_0}^{x_{\text{fin}}} f dx \\ \therefore K_{\text{fin}} + \left( - \int_{x_0}^{x_{\text{fin}}} f dx \right) &= K_{\text{ini}} + \left( - \int_{x_0}^{x_{\text{ini}}} f dx \right) \end{aligned}$$

のように，（終状態）＝（始状態）の形で記述することができる．両辺第 2 項が  $x_0$  から  $x$  までの経路に依存せず一意に決まるとき<sup>\*2</sup>，物体の位置情報を含んでいることから位置エネルギーと呼び，位置エネルギーが定義できる力を保存力と呼ぶ． $x_0$  は任意の位置に取ることができるため，位置エネルギー  $U$  が 0 となる位置（基準点）に定めるのが慣例である．

<sup>\*2</sup> 一意に決まらない例は摩擦がはたらく場合を考えてみるとよい．摩擦力の仕事の場合，始点と終点が同一であっても，その仕事の値は面上をずりずりと滑った道のりの長さに依存し，始点と終点だけでは一意に決まらない．このような場合，位置エネルギーは定義されず，このような力を非保存力と呼ぶ．

**2**  $vBl$  公式の電磁誘導, 多体系の力学

【メモ】

- ・回路の一部が動く電磁誘導は, 誘導起電力の決定では  $vBl$  の公式が基本となる.
- ・電磁誘導の問題は, ①誘導起電力の決定, ②回路の議論, ③運動の議論, ④エネルギーの議論, という作りが基本.
- ・ジュール熱  $J$  の計算は以下のように行う.

$$J = \begin{cases} RI^2 \times (\text{経過時間}) & (I \text{ 一定のとき}), \\ \text{エネルギー収支から逆算} & (I \text{ 一定でないとき}). \end{cases}$$

【解答】

問(1) (a) (i) 公式より,

$$E = \underbrace{v_0 Bl}.$$

(ii) キルヒホッフ則より,

$$v_0 Bl - 2rI_1 = 0 \quad \therefore I_1 = \frac{v_0 Bl}{\underbrace{2r}}.$$

(iii) 導体棒の運動方程式 (つりあい) より,

$$m \cdot 0 = F - I_1 Bl \quad \therefore F = I_1 Bl = \frac{(Bl)^2}{\underbrace{2r}} v_0.$$

(b) キルヒホッフ則, および導体棒の運動方程式より,

$$\begin{cases} \underbrace{v_0 Bl}_{=E} - r(I_A - I_B) - rI_A = 0, \\ E_0 - rI_A - rI_B = 0, \\ (m \cdot 0 = F - (I_A - I_B)Bl) \end{cases} \quad \therefore I_A = \frac{E_0 + E}{\underbrace{3r}}, \quad I_B = \frac{2E_0 - E}{\underbrace{3r}}.$$

問(2) キルヒホッフ則, および導体棒の運動方程式は,

$$\begin{cases} v_0 Bl - (R + r)I - \frac{Q}{C} = 0, \\ m \cdot 0 = F - IB\ell. \end{cases}$$

(a) 十分時間経過後  $\frac{dQ}{dt} = 0 (= I)$  となるため, キルヒホッフ則より,

$$Q = \underbrace{Cv_0 Bl}.$$

(b) 回路のエネルギー収支より,

$$v_0 Bl \Delta Q = J + \Delta \left( \frac{Q^2}{2C} \right) \quad \therefore J = v_0 Bl \cdot C v_0 Bl - \frac{1}{2} \frac{(C v_0 Bl)^2}{C} = \frac{1}{2} C (v_0 Bl)^2.$$

問(3) キルヒホッフ則, および導体棒の運動方程式は,

$$\begin{cases} v_1 Bl - v_2 Bl - 2r I_3 = 0, \\ m \dot{v}_1 = -I_3 Bl, \\ 2m \dot{v}_2 = I_3 Bl. \end{cases}$$

(a) キルヒホッフ則より,

$$v_1 Bl - v_2 Bl - 2r I_3 = 0 \quad \therefore I_3 = \frac{Bl}{2r} (v_1 - v_2).$$

(b) 運動方程式より,

$$\begin{cases} m \frac{\Delta v_1}{\Delta t} = -I_3 Bl, \\ 2m \frac{\Delta v_2}{\Delta t} = I_3 Bl \end{cases} \quad \Delta v_1 = -\frac{I_3 Bl}{m} \Delta t, \quad \Delta v_2 = \frac{I_3 Bl}{2m} \Delta t.$$

(c) 題意より  $\dot{v}_1 = \dot{v}_2 = 0$  であるから, 運動方程式より  $I_3 = 0$  であり, キルヒホッフ則より  $v_1 = v_2 (= V)$  を得る. 運動量保存則より<sup>\*3\*4</sup>,

$$mV + 2mV = mv_0 \quad \therefore V = \frac{1}{3} v_0 (= V_1 = V_2).$$

### 【補足 1】問(2)の外力がした仕事

キルヒホッフ則, および導体棒の運動方程式は,

$$\begin{cases} 0 = v_0 Bl - (R + r)I - \frac{Q}{C}, \\ m \cdot 0 = F - IBl. \end{cases}$$

キルヒホッフ則, および導体棒の運動方程式より, 系全体のエネルギー収支は<sup>\*5\*6</sup>,

$$0 \cdot v_0 = v_0 Bl I - (R + r)I^2 - \frac{Q}{C} I + F v_0 - IBl v_0 \quad \therefore \underbrace{F v_0}_{\text{外力の仕事率}} = \underbrace{(R + r)I^2}_{\text{消費電力}} + \underbrace{\frac{d}{dt} \left( \frac{Q^2}{2C} \right)}_{\text{静電エネルギーの時間変化率}}.$$

<sup>\*3</sup> 運動量保存則の導出については【補足 2】を参照.

<sup>\*4</sup> 誘導に従うのなら 1 つ前の結果より,

$$\Delta v_1 + 2\Delta v_2 = 0 \quad \therefore (V_1 - v_0) + 2(V_2 - 0) = 0$$

が成り立ち, これを用いればよい.

<sup>\*5</sup> キルヒホッフ則に電流  $I$  を, 運動方程式に速度  $v (= v_0)$  をかけ 2 式の和を取ればよい.

<sup>\*6</sup>  $\frac{Q}{C} \frac{dQ}{dt} = \frac{d}{dt} \left( \frac{Q^2}{2C} \right)$  であることを利用.

よって、外力のする仕事  $W_{\text{ex}}$  は設問で求めた誘導起電力のする仕事に等しく、

$$W_{\text{ex}} = v_0 B l \Delta Q = C(v_0 B l)^2.$$

なお、キルヒホッフ則は、

$$\frac{dQ}{dt} = -\frac{1}{(R+r)C} (Q - C v_0 B l)$$

と空気抵抗型の微分方程式となる。この微分方程式の一般解は指数関数であり、 $t = 0$  で  $Q = 0$  であることから、

$$Q = C v_0 B l \left(1 - e^{-\frac{1}{(R+r)C} t}\right)$$

を得る。ここで、運動方程式より、

$$F = I B l = \frac{dQ}{dt} B l = \frac{v_0 (B l)^2}{R+r} e^{-\frac{1}{(R+r)C} t}$$

となり、外力のする仕事は仕事の定義から、

$$\begin{aligned} W_{\text{ex}} &= \int_{x_{\text{ini}}}^{x_{\text{fin}}} F dx = \int_0^{\infty} F \frac{dx}{dt} dt = \int_0^{\infty} \frac{(v_0 B l)^2}{R+r} e^{-\frac{1}{(R+r)C} t} dt \\ &= \left[ -(R+r) C \frac{(v_0 B l)^2}{R+r} e^{-\frac{1}{(R+r)C} t} \right]_0^{\infty} \\ &= C(v_0 B l)^2 \end{aligned}$$

と求めることもできる。設問で問われたジュール熱  $J$  も同様である。

### 【補足2】問(3)の運動量保存則

キルヒホッフ則、および導体棒の運動方程式は、

$$\begin{cases} v_1 B l - v_2 B l - 2r I_3 = 0, \\ m \dot{v}_1 = -I_3 B l, \\ 2m \dot{v}_2 = I_3 B l. \end{cases}$$

運動方程式の和を取って、

$$\begin{aligned} m \frac{dv_1}{dt} + 2m \frac{dv_2}{dt} &= 0 \\ \frac{d}{dt} (m v_1 + 2m v_2) &= 0 \quad \therefore m v_1 + 2m v_2 = \text{const.} \end{aligned}$$

### 3 熱力学（熱あり過程，断熱過程）

#### 【メモ】

・熱力学の基本的（むらがなく熱あり）な過程に関する問題。定石は，可動部分のつりあいから圧力の決定，状態方程式から温度の決定。内部エネルギー変化を公式，気体のする仕事を  $P-V$  図の面積評価，熱力学第 1 法則を通じて熱を計算。

・問(4)は準静的な断熱過程に関する問題。準静的な断熱過程では，ポアソンの公式から圧力か体積の決定，状態方程式から温度の決定。熱力学第 1 法則は仕事の決定方程式となる。

・全体的に使用する文字が統一されていなくややこしい。

#### 【解答】

問(1) 可動部分（シリンダ，ピストン）のつりあい，および状態方程式は\*7，

$$\begin{cases} \begin{cases} \text{シリンダ} : 0 = P_0 S + mg - P_1 S, \\ \text{ピストン} : 0 = P_1 S - (P_0 + \rho g d) S, \\ P_1 S L_1 = n R T_0. \end{cases} \end{cases}$$

(a) 状態方程式より，

$$L_1 = \frac{n R T_0}{P_1 S}.$$

(b) つりあいの 2 式より，

$$\rho S g d = mg \quad \therefore d = \frac{m}{\rho S}.$$

(c) シリンダのつりあいより，

$$P_1 = P_0 + \frac{mg}{S}.$$

なお，以上より  $L_1 = \frac{n R T_0}{P_0 S + mg}$  とわかる。

問(2) (a) ピストンの液面からの深さを  $x$  とする。可動部分（シリンダ，ピストン）のつりあい，および状態方程式より\*8，

$$\begin{cases} \begin{cases} \text{シリンダ} : 0 = P_0 S + mg - P_2 S, \\ \text{ピストン} : 0 = P_2 S - (P_0 + \rho g x) S, \\ P_2 S L_2 = n R T_2 \end{cases} \end{cases} \quad \therefore T_2 = \frac{P_0 S + mg}{n R} L_2 = \frac{L_2}{L_1} T_0.$$

\*7 シリンダのつりあいから  $P_1$  を決定→ピストンのつりあいから  $d$ ，状態方程式から  $L_1$  を決定。

\*8 シリンダのつりあいから  $P_2$  を決定→ピストンのつりあいから  $x$ ，状態方程式から  $T_2$  を決定。

- (b) シリンダのつりあいより気体の圧力  $P$  は一定である。よって、気体のする仕事  $W$  は  $P-V$  図の面積より、

$$W = \left( P_0 + \frac{mg}{S} \right) S(L_2 - L_1) = \underbrace{P_1 S(L_2 - L_1)}.$$

- (c) 熱力学第1法則より、

$$\begin{aligned} Q &= \frac{3}{2} nR \left( \frac{L_2}{L_1} T_0 - T_0 \right) + P_1 S(L_2 - L_1) \\ &= \frac{5}{2} \left( \frac{L_2}{L_1} - 1 \right) \underbrace{P_1 S L_1}. \end{aligned}$$

- 問(3) (a) 張力の大きさを  $F$  とする。可動部分（シリンダ，ピストン）のつりあい，および状態方程式より\*9，

$$\begin{cases} \begin{cases} \text{シリンダ} : 0 = P_0 S + mg - P_3 S - F, \\ \text{ピストン} : 0 = P_3 S - P_0 S, \\ P_3 S L_3 = nRT_0 \end{cases} & \therefore L_3 = \frac{nRT_0}{P_0 S} = \frac{P_1}{P_0} L_1. \end{cases}$$

- (b) ピストンのつりあい，および状態方程式より\*10，

$$\begin{cases} 0 = P_L S - \{P_0 + \rho g(L - L_3)\} S, \\ P_L S L = nRT \end{cases} \quad \therefore P_L = \underbrace{P_0 + \rho g(L - L_3)}.$$

- (c)  $P-V$  図の面積より、

$$W = \int_{L_2}^{L_3} \{P_0 + \rho g(L - L_3)\} S dL = P_0 S(L_3 - L_2) - \frac{1}{2} \rho g S(L_3 - L_2)^2.$$

ここで、 $d = L_2 - L_3$ ， $d = \frac{m}{\rho S}$ ， $P_1 S = P_0 S + mg$  より、

$$W = P_0 S(L_3 - L_2) - \frac{1}{2} \rho g S(L_3 - L_2)^2 = -P_0 S d - \frac{1}{2} \rho S g d^2 = -\frac{1}{2} (P_0 + P_1) S d.$$

よって、気体のされた仕事  $W'$  は、

$$W' = -W = \frac{1}{2} \underbrace{(P_0 + P_1) S d}.$$

- (d) 気体の内部エネルギー変化は、

$$\Delta U = \frac{3}{2} nR(T_0 - T_2) = \frac{3}{2} nR \left( T_0 - \frac{L_2}{L_1} T_0 \right) = \frac{3}{2} P_1 S(L_1 - L_2) = -\frac{3}{2} W.$$

よって、熱力学第1法則より、

$$Q = \Delta U + W = -\frac{3}{2} W - W' \quad \therefore Q' = -Q = \underbrace{W' + \frac{3}{2} W}.$$

\*9 ピストンのつりあいから  $P_3$  を決定→シリンダのつりあいから  $F$ ，状態方程式から  $L_3$  を決定。

\*10 ピストンのつりあいから  $P_L$  を決定→状態方程式から  $T$  を決定。



問(4) ピストンの液面からの深さを  $x$  とする. 可動部分 (シリンダ, ピストン) のつりあい, ポアソンの公式, および状態方程式は\*11\*12\*13,

$$\left\{ \begin{array}{l} \left\{ \begin{array}{l} \text{シリンダ} : 0 = P_0 S + mg - P_4 S, \\ \text{ピストン} : 0 = P_4 S - (P_0 + \rho g x) S, \end{array} \right. \\ P_4 (SL_4)^{\frac{5}{3}} = P_3 (SL_3)^{\frac{5}{3}} = P_0 (SL_3)^{\frac{5}{3}}, \\ P_4 SL_4 = nRT_4. \end{array} \right.$$

$$L_3 = \frac{P_1}{P_0} L_1, \quad P_1 S = P_0 S + mg \text{ より,}$$

$$\begin{aligned} \left( P_0 + \frac{mg}{S} \right) L_4^{\frac{5}{3}} &= P_0 L_3^{\frac{5}{3}} = P_0 \left( \frac{P_0 + mg/S}{P_0} L_1 \right)^{\frac{5}{3}} \\ \therefore L_4 &= \left( \frac{P_0 + mg/S}{P_0} \right)^{\frac{2}{5}} L_1 = \underbrace{\left( 1 + \frac{mg}{P_0 S} \right)^{\frac{2}{5}}}_{>1} L_1. \end{aligned}$$

よって,  $L_4 > L_1$  であり (あ).

\*11 シリンダのつりあいから  $P_4$  を決定→ピストンのつりあいから  $x$ , ポアソンの公式から  $L_4$ , 状態方程式から  $T_4$  を決定.

\*12  $L_3 = \left( 1 + \frac{mg}{P_0 S} \right) L_1$  より,  $L_3 > L_4$  である. このことから体積は減少しており, この過程において気体のする仕事が負になることがわかる (1つ下の脚注で計算している).

\*13 この過程で気体が外部にした仕事:  $W = -\Delta U = -\frac{3}{2} nR(T_4 - T_0) = -\frac{3}{2} \left\{ \left( 1 + \frac{mg}{P_0 S} \right)^{\frac{2}{5}} - 1 \right\} nRT_0$ .